

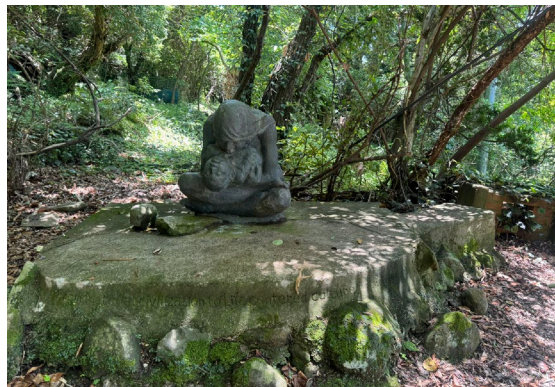
2024年度 東日本・家族応援プロジェクト+

福島・多賀城

村本邦子（立命館大学）

2026年5月5月29日、文化人類学会の水俣病フィールドワークに参加した。水俣は、私の女性支援のフィールドであり、友人も暮らしているため、20年以上通っている所である。水俣病に関しても、何度も関連博物館や地点を訪れているし、十年以上前には、平和学会でのフィールドワークで、相思社の宿泊研修に参加した。今回は、相思社のまち案内と考証館案内だった。1日目の学会主催シンポジウム「水俣と文化人類学」の平井京之介さんによれば、相思社のガイドは個性豊かにリアルな水俣を伝えることをモットーとし、それぞれが感じる水俣の魅力なり水俣病の魅力なりを語るのだという。永野三智さんによるガイドも個性的で、怒りやユーモアに満ち考えさせられることが多かった。訪問者と対話しながら進めるためには標準化しないということはとても大事だと思う。その代わり、毎朝、スタッフミーティングを持って、日々のガイドの経験や感じたことなどを共有し議論しあっているそうだ。

水俣病は1958年の全国食中毒事件録に独立項目として存在し(その根拠は猫や水鳥も罹患しているということだった)、食中毒と定義されると食品衛生法が適用され、魚の捕獲を禁止されることになるはずだったが、そうならなかったために、魚介類を食べ続けた。これを食中毒と認めることが重要だが、いまだにもめているとのこと。何度行っても初めて知ることが多い。写真はフィールドワーク前に訪れた乙女塚。胎児性水俣病はじめ失われた命の鎮魂と祈りの場。水俣ではそんな命のすべて宝と呼んで大切にされた。



2024年8月29日(木)

台風騒動のなかで

世の中は台風が来ると大騒動していたが、事前のフィールドワークを予定していたため、予定通り前日の朝の新幹線で12:31福島着。途中、事務室より連絡があり、台風の場合の措置を確認する。

実は1週間ほど前から台風情報が出され、その進行が最初の予報から遅れに遅れ、東海道新幹線が3日間計画運休するなど、先がはっきり見えないなかだった。当然ながら、メンバーとは出発前に入念な確認をすませてある。これはそもそも災害に関するプロジェクトであるから、常に情報に注意するが、情報に振り回されず賢明に判断・行動すること。すなわち、実施を前提に、交通手段がなかったり、警報が出た場合はキャンセルし、可能な部分は実施する。交通手段が途絶えたら、回復したところで実施可能かどうか判断する、現地まで行ったものの現地に警報が出るような状態であれば中止し、時期を見てオンラインで補う。連絡網を作成し、随時、連絡を取り合うということで、結果的に、冷静な判断のもと、滞りなく移動とプロジェクトを実施することができた。

桧久里珈琲

まずは、桧久里珈琲を訪問する。おいしいトースト、ケーキ、コーヒーを頂きながら、ママさんと2時間ほどゆっくりお話しする。マスターは、6月に東チモールのコーヒー農園を見学してきたそうだ。10月にはあるご夫妻と一緒にブルゴーニュへ行かれるとのこと、双葉から避難してきて、近くでワイン農

園を始めたご夫婦だそうだ。これまではブドウを取り寄せて醸造していたが、今年初めてブドウが出来て、地産のワインができた。妻は双葉の介護施設で働いており、利用者を避難させるために原発事故の灰を浴びて、因果関係は分からないと言われているそうだが、乳癌になった。回復したら一緒に行こうと約束して、手術して、今は良くなったそうだ。また紹介したいと言ってくださる。

珈琲店は平日なのに混みあっていて、案外と浜通りの人たちが来るのだという。きのうも半分くらいは浜通りの人たちだった。それでも、誰もいない時にはしゃべることもあるが、原発事故関係の話は誰もしないのだそうだ。安心して自分のままでいられる場所があることがいいのだろう。

福島に通うようになって、よくポスターを見かける五色沼を見たくて、今回は五色沼の近くの宿をとる。パラパラと雨が降るので、ハイキングはやめてチェックインする。新幹線は計画運休となったため、鶴野さんとM2メンバー(昨年の参加者で今年も合流したいと予定していた)は来ることを断念、M1のメンバーの飛行機は飛ぶ予定と連絡が入る。





8月30日(金) 会津若松

今回はまだ行ったことがなかった会津若松のフィールドワークを予定した。2011年から東北に通うようになって、半ば冗談のように、ここでは「先の戦争」とは戊辰戦争のことであって、「薩摩藩出身だとは言わない方がいいよ」と言われることがあった。私自身はもうひとつよくわかっておらず、新撰組と白虎隊の区別もつかないほどだったので、少し勉強しようと思ったのだ。大学時代、フランス語の試験に「新撰組について思うことを書きなさい」という問題が出て大いに困り、話を反らしてアルセーヌ・ルパンのことを書いたことがあった(フランス語力の試験なので合格した)。フランス語の先生は、日本人が新撰組大好き現象に興味を持っていた。

自分のために、簡単に歴史をまとめておく。

戊辰戦争と白虎隊

戊辰戦争とは、1868年から1869年にかけて起こった旧幕府勢力と新政府軍との内戦。1867年、徳川慶喜は政権を朝廷に

返す大政奉還を行い、江戸幕府は形式上終わったが、その後の政治の主導権をめぐり、薩摩・長州を中心とする新政府側と、徳川家・旧幕府側との対立が深まる。会津藩主の松平容保は幕府から京都守護職を命ぜられ、不穏な京都の治安を任されていた。その結果、1868年1月に鳥羽・伏見の戦いが起こり、戊辰戦争が始まった。

鳥羽・伏見の戦いでは、京都近郊で新政府軍と旧幕府軍が衝突、旧幕府軍が敗北し、勝海舟と西郷隆盛の交渉によって江戸城は大規模な戦闘なしに明け渡される。新政府軍は東北に進軍し、会津藩を中心に、仙台藩・米沢藩などが奥羽越列藩同盟を結んで抵抗した。新政府軍の標的は会津に向けられ、同年8月22日に旧幕府軍が猪苗代町の母成峠で敗退すると、新政府軍は若松城下に攻め入り9月22日に旧幕府軍が降伏するまで会津各地で戦いが繰り広げられた。この一連の戦いをこの年の干支にちなんで戊辰戦争という。この中で、会津戦争や白虎隊の悲劇が起こる。城下のいくつかの武家屋敷で婦女子が自刃するという悲劇があり、旧幕府海軍の榎本武揚らが北海道の箱館(現在の函館)に移り、五稜郭を拠点に抵抗したが、1869年、箱館戦争の終結によって戊辰戦争は終わった。

新政府軍は、薩摩、長州、土佐、肥前などを中心とする勢力で、旧幕府側は、徳川家、旧幕府軍、会津、桑名、奥羽越列藩同盟、箱館政権などだった。戊辰戦争は明治維新を完成させた戦争として語られるが、東北、とくに会津から見ると、それは新政府軍による討伐戦であり、地域社会に深い傷を残した戦争だった。会津藩は朝敵・賊軍とされ、敗戦後

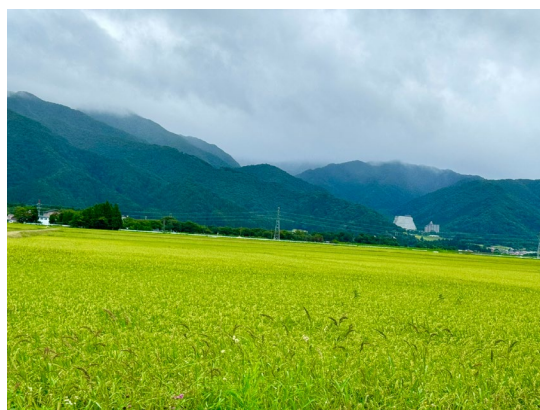
も厳しい処分を受けるとともに甚だしい屈辱を生んだ。

白虎隊は16～17才の会津藩士子弟で編成された少年部隊。8月22日、藩主松平容保の近衛兵として滝沢本陣に出陣した白虎士中二番隊は敵を戸ノ口原に迎え撃つも、新政府軍の猛攻に敗走、飯盛山にたどり着いた。ここで目にしたのは砲煙と炎に包まれた城下で、少年たちは城下が燃える様子を見て若松城が落城したと思ひ込み、入城すべきか、敵軍に突入し玉砕すべきか激論が交わされたという。最後には「十数人ではとても対抗できない敵の圧倒的戦力の前で、捕虜になって敵の恥辱を受けるようなこととなれば、君侯と祖先に申し訳が立たない」との思いから「潔く自刃して武士の本文を明らかにする」道を選んだ。奇跡的にひとり蘇生した飯沼貞吉によって白虎隊の行動が後世に伝えられた。飯盛山の中腹にある墓地には自刃した十六士とこれ以前に戦死した3名が加えられ、十九士の墓が正面に、右手には戸ノ口原などで戦死した少年たちの墓が立ち並んでいる。白虎隊は、会津戦争の悲劇、若者たちの忠義、戊辰戦争における敗者の記憶を象徴する存在として語られている。

ちなみに、新撰組は会津藩主松平容保が京都守護職時代に、その配下となって京都の治安にあたった組織で、1864年の池田屋事件で有名になった。鳥羽伏見の戦いの後、局長の近藤勇は捕らえられて斬首、副長の土方歳三は宇都宮の戦いで負傷した後、会津に入った。三番隊組長の齋藤一も土方とは別ルートで会津入りし、土方が函館に去ると、新撰組の生き残りを会津で指揮した。

むつのプロジェクトで時々見かけた斗南藩

の史跡は、戊辰戦争で敗れた会津藩が戦後に下北半島へ移され斗南藩として再出発した歴史を伝えるもので、会津若松が戦いと落城の記憶の場所だとすれば、下北・斗南は、敗戦後の移住、貧困、開拓、死者、そして会津人としての誇りを保とうとした記憶の場所とされる。なるほど。



福島県立博物館

まずは福島県立博物館へ。総合展示では旧石器時代から、部分展示では、考古や自然、有名なフタバズキリュウの化石、民俗では「雪国のくらしとものづくり」をテーマに、大型スクリーンに奥会津の自然や人々の営みが映し出され、厳しい雪に対抗するために工夫された道具や、自然素材を利用した編み組細工などの数々が展示されていた。





また、「美しき刃たち」という特別展をやっていた。

飯盛山白虎隊十九士の墓

それから動く歩道で飯盛山に上り、白虎隊十九士の墓を見に行く。驚くほどたくさんの石碑がある。それだけ会津の人たちの精神的支柱となっているということだろうか。







白虎隊十九士の墓の広場から階段を降りると、かなり個性的な土産物屋があり、一服したが、店の人が台風水害のことやコロナ禍のことなど話してくれた。



白虎隊記念館・伝承史学館

それから、白虎隊記念館に向かった。白虎隊だけでなく、会津藩関係の史料を所狭しと展示してあった。

あまりよくわからず行ったのだが、ここは、昭和31年に会津若松出身の弁護士であった故・早川喜代次により、白虎隊をはじめとする会津藩の歴史を後世に伝えたいという思いから、私財を投じて作られたのだそう。その後、水害に遭い建物は全壊、途方に暮れていたところ、全国からの多大なる支援で再建され、一般財団法人になった。



次は、白虎隊伝承史学館へ。明治維新における会津藩の立場を 5,000 点の史料で展示・解説する歴史資料館ということで、こちらも民間のものだった。やはり、会津藩や白虎隊の歴史に強い思いを持つ人たちが少なからずいるということだろう。紙芝居や腹話術を使った白虎隊の語り継ぎもやっているらしく、「伝承茶屋」というのがあって、とても興味を惹かれたが、誰もおらず残念だった。次回は是非、電話で予約してから来てみたい。





8月30日(金)白河交流会

夜は白河でプロジェクト前の打ち合わせを兼ねた交流会。会津旅行中、フェイスブックを見た映画監督の池谷薫さんが白河に若い頃入り浸っていた店があると紹介してくれたイタリアン・サンサーラに集合した。

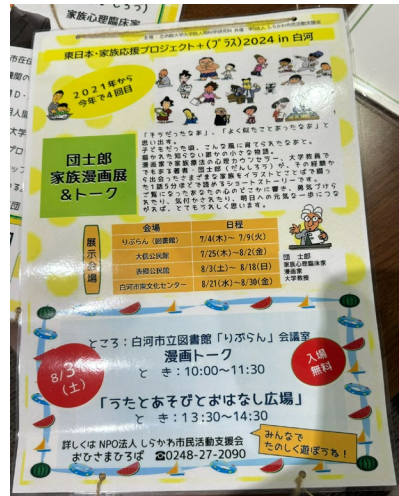
院生たちは、その後、おひさま広場の見学をさせてもらった。



8月31日(土)プロジェクト in 白河

朝9時集合で、NPO法人しらかわ市民活動支援会との共催で、りぶらん(白河市立図書館)にてプロジェクト、「団士郎漫画トーク」と「歌と遊びとお話の広場」を開催した。今年の家族漫画展は、2カ月かけて、りぶらん(7月4～9日)、大信公民館(7月25日～8月2日)、表郷公民館(8月3～18日)、白河市東文化センター(8月21～31日)の4機関で巡回展をしてもらった。

午前のトークは人が少なかったが、午後は10組ほどの親子と民話のメンバーが来てくれて、賑わった。小磯厚子さん(おひさま広場副代表)が歌やお手玉遊びを、鳴島あや子さん(白河語りの会)がエプロンシアターなど使いながら昔話を語ってくれた。年齢の低い子どもたちが多かったにも関わらず、うまく子どもたちの関心を惹き続けながら、世代を超えて沢山の家族が楽しいひとときを一緒に過ごした。お父さんの参加も多く、また、今年もEMANONから高校生男子2人がボランティアとして参加してくれ、スタッフ間の世代交流も進み、院生たちにとっても楽しい時間だったようだ。





8月31日(土)多賀城交流会

反省会と撤収作業を終え、いったん解散。私たちは、南湖公園の明治記念館、ランプカフェで一服してから多賀城へと向かう。

夜は、多賀城・塩釜プロジェクトのみなさんと打ち合わせ・交流会だった。いつもながらに院生たちはたくさんの貴重なお話を聞かせて頂いた。



9月1日(日)プロジェクト in 塩釜

東日本・家族応援プロジェクト多賀城実行委員会主催、おおぞら保育園共催の形で、今年は、ふれあいエスプ塩釜にて、「団士郎漫画トーク」を行った。アンケートには、「毎年楽しみにしています」という人たちが、遠方から来ている人たちもおり、一定程度団さんのファン層がいるようだった。

漫画展は、8月24日(土)から9月5日(木)までギャラリー開催してもらい、塩釜の新しい会場で多くの方に見てもらえたようである。





実物展示で宮城海上保安部所属の巡視船「まつしま」の羅針盤機器があった。「まつしま」は、発災時刻に福島県相馬市の沖合約5kmの海上にあって、大津波に遭遇し、押し寄せる大津波に船首を垂直に向け、幾重にも連なる10m超の大津波を乗り越えた。その時撮影された映像をディスプレイで疑似体験することができる。



終了後、いったん解散して、それぞれ新地町まで移動する。私たちは、塩釜のマリンゲートに隣接する塩釜市津波防災センターに立ち寄った。館内では、主に震災の発災から1週間に焦点を当て、市内の被害や出来事、得られた教訓を伝承し、防災意識を啓発し高める展示を行っていた。

